

東日本大震災

3月13日～21日、山形県米沢市・宮城県石巻市訪問

3月11日に発生した東日本大震災。都市生活コミュニティセンター（TCC）では事務局長の福田和昭を現地に派遣し、災害救援を行う神戸のNGO、被災地NGO協働センターと共に、3月13～21日の間、救援活動を行いました。以下は、福田のレポートです。

3月13日 出発～山形へ

被災地NGO協働センターの先遣隊は、震災当日の11日晩に神戸を出発、宮城県名取市や岩手県南三陸町など、津波で甚大な被害を受けた地域の調査をしていました。

私は13日晩に神戸を出発。協働センターのボランティアと共に北陸道経由で東北へ向かい、14日午前に山形県庁に到着しました。県災害ボランティア本部の会合に参加した後、山形県米沢市へ。神戸の震災以来お世話になっている生活クラブやまがたを訪ねます。当初はそのあと、宮城県に入り、被災地の様子を伺う予定でした。



米沢市役所（市議会議事堂）での避難者受付。届いた毛布をその場で配布した。

3月14日 米沢に避難者が

生活クラブやまがたは米沢市と災害時応援協定を結んでいます。

14日午前、米沢市の危機管理室から生活クラブやまがたの井上肇理事長に「福島からの避難者が続々と米沢にきている」と一報がありました。

福島第一原発の事故を受け、県境を越えて逃れてきた人が14日時点で100名超。米沢市は震度5の揺れがあったものの、ライフラインも無事で大きな被害はなかったのですが、急遽、避難者の受け入れに追われました。

私たちが米沢に留まり、避難所の環境整備や救援物資の受け入れ、ボランティア活動の準備にあたりました。

3月15日 救援物資

原発事故の状況が余談を許さない状況で、避難者は増加の一途。災害時は近所の人々でまとまって避難することが多いのですが、今回は広域災害に加えて原発事故で、避難者の出身地域も様々です。一度入った避難所から再避難を余儀なくされた人もいます。

この日は各地から救援物資が運び込まれました。静岡県ボランティア協会から毛布500枚、九州のグリーンコープからは10tトラックで生活用品。米沢市でも市民に物資の提供を呼びかけ、生活クラブやまがたが運営するグループホーム「結いのき」が集積場所になり、受付のマニュアル作成や問い合わせの対応にあたりました。



3月16・17日 避難所

この日から協働センター先遣隊の吉椿雅道さんと合流。井上さんと共に市役所・社会福祉協議会を訪問し、今後の避難所運営やボランティアの活動方針、米沢から被災地へ向けての救援活動の展開について、要望と意見交換をしてきました。

米沢市の避難者数は585人になり、市立体育館（上写真）は満杯。

東北地方は寒波に見舞われ、米沢も雪に覆われました。福島の被災地は冬でも雪のない地域で、避難者は雪への備えがありません。長靴がなければ外出も出来ず、風呂に入れられないまま避難以来、着の身着のままの方ばかり。体育館には液晶テレビが設置され、大人たちがストーブを囲んでニュースを見つめています。その脇ではアニメのビデオを流していて、10人近くの子どもが無言で画面に見入っていました。

山形県内はガソリンが極端に不足していて、開店しているガソリンスタンドは朝から百台を超える車列、3時間も5時間も待って、10ℓの給油とか、途方に暮れる事態です。遠くの親類を頼るにも身動きが取れず、米沢に留

まっているという話も聞きました。

3月18・19日 足湯隊始動

地元米沢の学生も人づてで「結のき」に集まり、ボランティアに加わるようになりました。地震から一週間目の18日、地元の若者を交えた「足湯隊」が避難所での活動をスタート。吉椿さんの指導で、お湯を張ったたらいとイスを用意し、訪れた人々に言葉をかけながら指先や手のひらのマッサージを行います。ぼつりぼつりと語られるつぶやきは被災の経験談や将来の不安。

身も心も温まると好評の足湯ですが、そこから垣間みる現実は重く、厳しいものがあります。そんな中、数日前にボランティアに加わったばかりの地元の人々が真摯に被災者と向き合う姿は一筋の光明のようでした。

3月20日 宮城県石巻市へ

宮城県石巻市は津波で大きな被害を受けた街です。そこに入ったボラン



ティアから人もモノも足りない窮状を伝える連絡が入りました。

3月20日、生活クラブやまがたのトラック2台に救援物資を満載し、米沢と神戸のボランティアとともに石巻へ向かいます。米沢からは片道4時間。生協職員は生産者の安否確認、ボランティアは避難所の現状把握と可能であれば足湯の実施。

石巻市内は、海に近づくにつれ被害がひどくなり、流された自動車、道路に横たわる漁船、倒壊した家屋と瓦礫の山、防潮堤が壊れて浸水した道路…凄惨な光景に言葉もありません。

辿り着いた小学校の避難所は、校庭と1階と体育館が津波に飲まれ、一面が十数cmの泥に覆われて、物資を下ろすこともままなりません。2階以上が生活の場ですが、廊下は泥だらけ、窓の外には津波の惨状が広がります。

地震から9日も経つのに電気も水道も断絶したまま。満足な食料の配給もなく、地震後はじめての炊き出しは

8日目。これが協働センターの手配で届いた宮城県・新燃岳の野菜で、宮崎の被災農家からの応援メッセージが読み上げられたとき、校舎中の窓が開いて拍手が沸き起こったそうです。

まずは避難者の方々と体育館の泥の撤去にあたりました。作業が一段落する頃、自治会長の了解を得て、足湯を提供しました。会場の図書室は、2時間の間、行列が途切れることのない盛況ぶり（下写真）。

2日間山の上でたき火を焚いて過ごした男性、3日間自宅の2階で助けを待っていた女性、工場が被災し20名ほどの従業員が行方不明のままという夫妻。話を聞けばかりで、こちらからかけられる言葉もなく、足湯のあと感謝の気持ちを表すみなさんに、ただただ頭がさがるばかりでした。

今回の震災は未だ緊急救援の時期を脱せず、復旧・復興は阪神・淡路以上の困難が待ち受けます。TCCは今後も息長く、支援活動を継続します。



あしすと Report

垂水 昨年末に初めて、母と妹と女3人で旅行に行きました。旅行と言っても民宿に泊まってカニのフルコース…貧乏旅行です。私も妹もやっと子育てが落ち着き、子供たちもきちんと留守番してくれる年齢になったからこそ実現した小旅行です。母はとてとても喜んでくれました…スポンサーは母ですが…私は運転手。私も妹も楽しかったのは当然ですが、女3人の旅行は…かしましい～。車中はBGMを聞く事も無く3時間程

度喋りまくり…ほど良くお腹もすいての食事はまた格別でした。母が元気な間に後何回一緒に旅行に行けるでしょうか??後悔することの無いようにできるだけたくさん、母と妹との女3人旅行を定例化してやろう～!!と心に誓った一日でした。(廣瀬久美子)

武庫之荘 「東北関東大震災」地震の大きさ、津波の凄さ、恐ろしさ、原子力発電所の事、まだまだ行方のわからない方も大勢居られ、この寒い中避難所で生活、大変な事と思います。心よりお見舞い申し上げます。▽ (研修) 自

分に何が出来るのか。自立の為の支援とはと、支援を受けられるまでの生活環境、一人一人考え方・生活のあり方のものさしが違い、支援もその方に寄り添い何が必要なのか、何が大事なのか、どう支援すれば生活しやすく、前向きになって頂け、有意義に暮らしていただけるか。一緒に行く事の範囲、目的が手段になってはいないか!等々。自己流のやり方になっていないか?ヘルパーのやり易い様にしていないか?振り返りつつ、その方の何が大事かを学び、考え、反省、次につなげる様頑張っています。(立川マチ子)